

統計編 第1部 最新がん統計



罹患の概要

■最新集計について

集計の期間

罹患年月日が令和4（2022）年1月1日から12月31日の間の1年間。過去の罹患年についても再集計。

精度指標

DCI：3.03%

DCO：1.86%

MI比：0.41

集計の時期

令和8（2026）年3月11日時点

罹患年月日の決め方

- ①届出による登録例は初めて当該がんと診断された年月日を罹患年月日とする。
- ②届出がなく、死亡小票の写しによってがん罹患が判明した例は、死亡年月日をもって罹患年月日とする。

■ 罹患の概要

2022年に山口県において、男性延べ6,856件、女性延べ5,206件、合計延べ12,062件の上皮内がんを除くがんが新たに診断された。男性で最も多いがんは前立腺がんであり、大腸（結腸・直腸）、肺、胃、肝および肝内胆管と続く。女性で最も多いがんは、乳がんであり、大腸（結腸・直腸）、肺、胃、子宮と続く（図1）。

図1 部位内訳（%）上皮内がんを除く（表1-Aから作成）

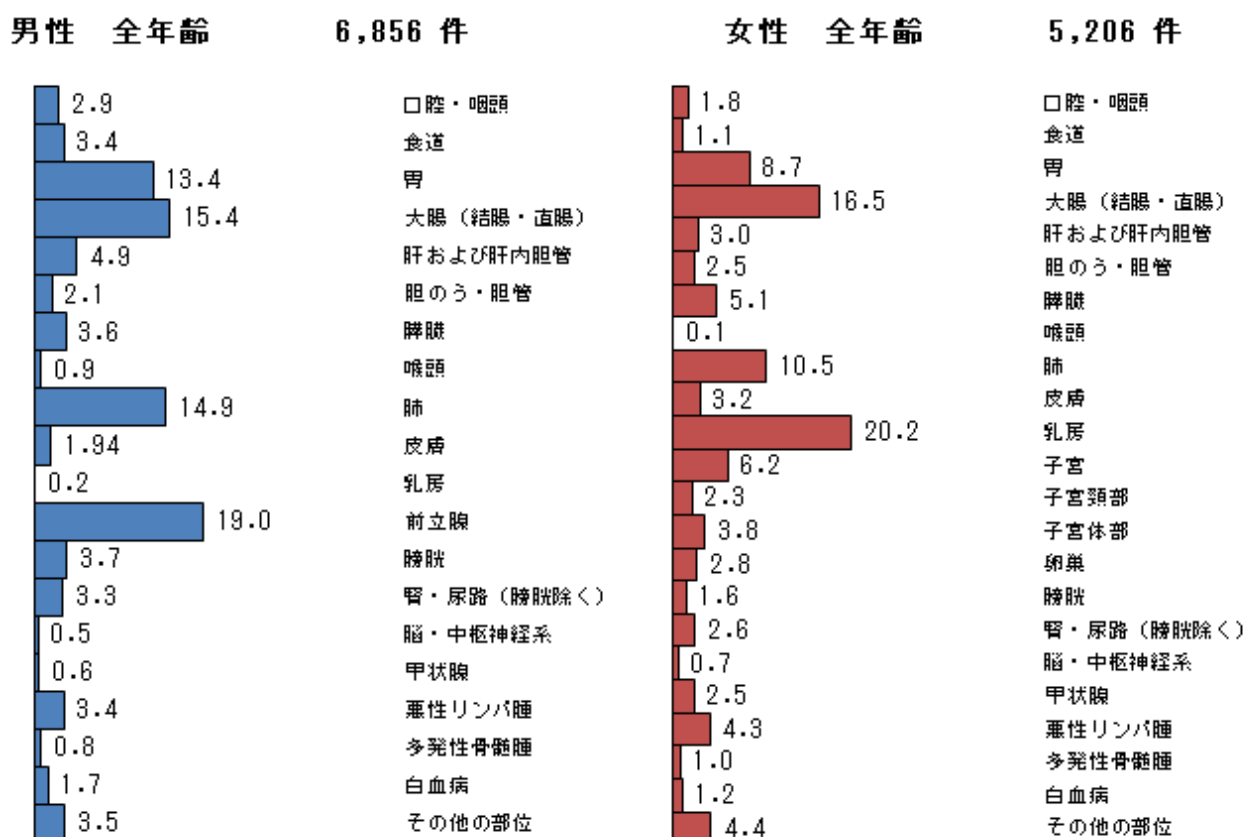
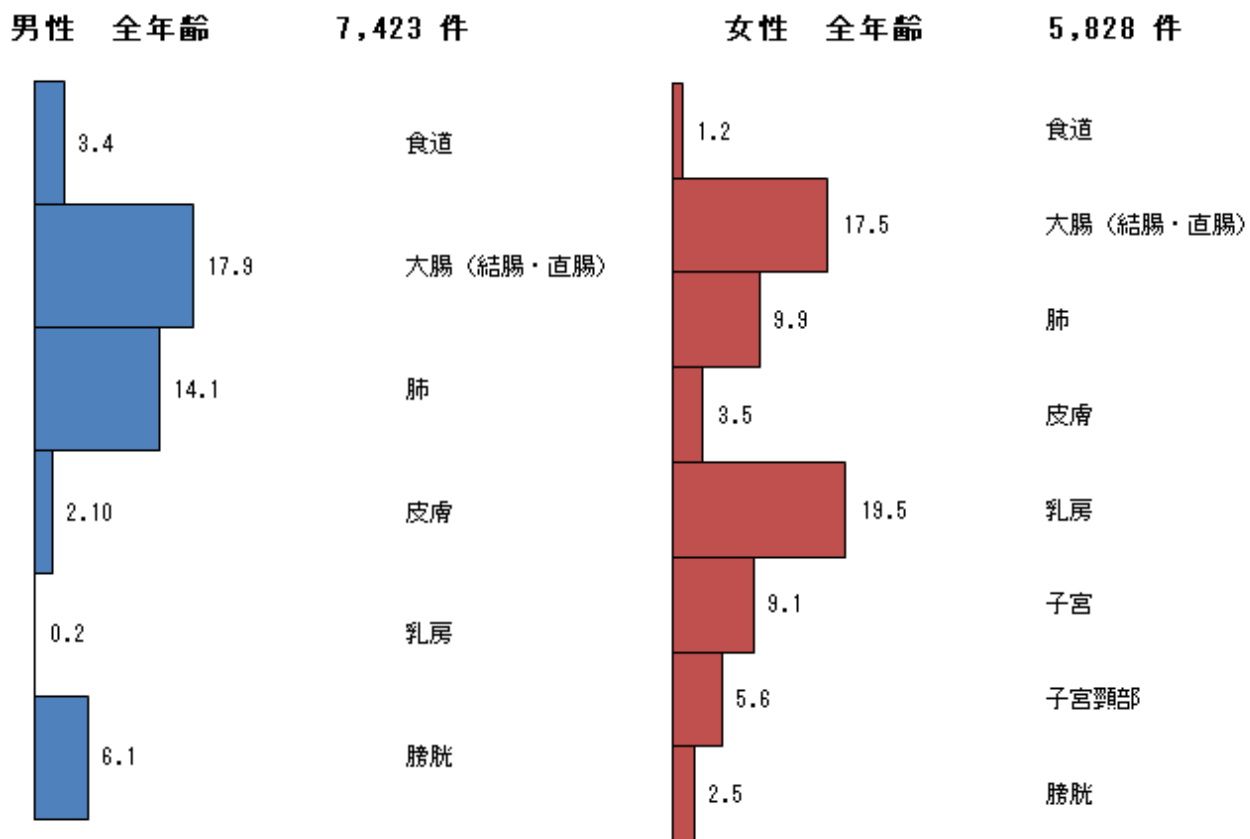


図 1-2 部位内訳 (%) 上皮内がんを含む (表 1-B から作成)



年齢別にみたがんの罹患

年齢別にみると、2022年に新たに診断されたがんの約8割が65歳以上だった。一方、働き盛りの40-64歳の年齢層も全体の約2割弱を占めている(図2)。

女性の15-39歳のがんが男性よりも多いのは、この年齢層の乳がんと子宮頸がんが多いためである。(図3)

ほとんどのあらゆる部位のがんは、年齢が高くなるほどかかりやすい。主ながんの年齢階級別罹患率をみると、胃は男性の60歳以上、女

性の70歳以上で千人にひとり以上、大腸(結腸・直腸、上皮内がんを除く)は男性の55歳以上、女性の60歳以上、肺は男性の60歳以上、女性の65歳以上で、それぞれ千人にひとり以上が罹患している。また、乳房(女性のみ、上皮内がんを除く)は、40歳以上で千人にひとり以上が罹患しており、他の部位と比べて、かかりやすい年齢が若い傾向にある。さらに、女性の25歳から50歳未満で、子宮頸部の上皮内がんの罹患が多い。(図4)

図2 年齢別内訳(%) (表2-Aから作成)

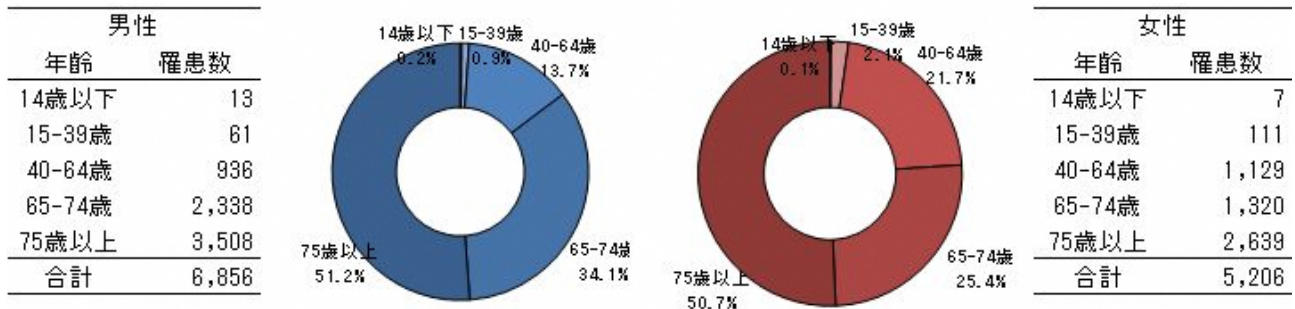
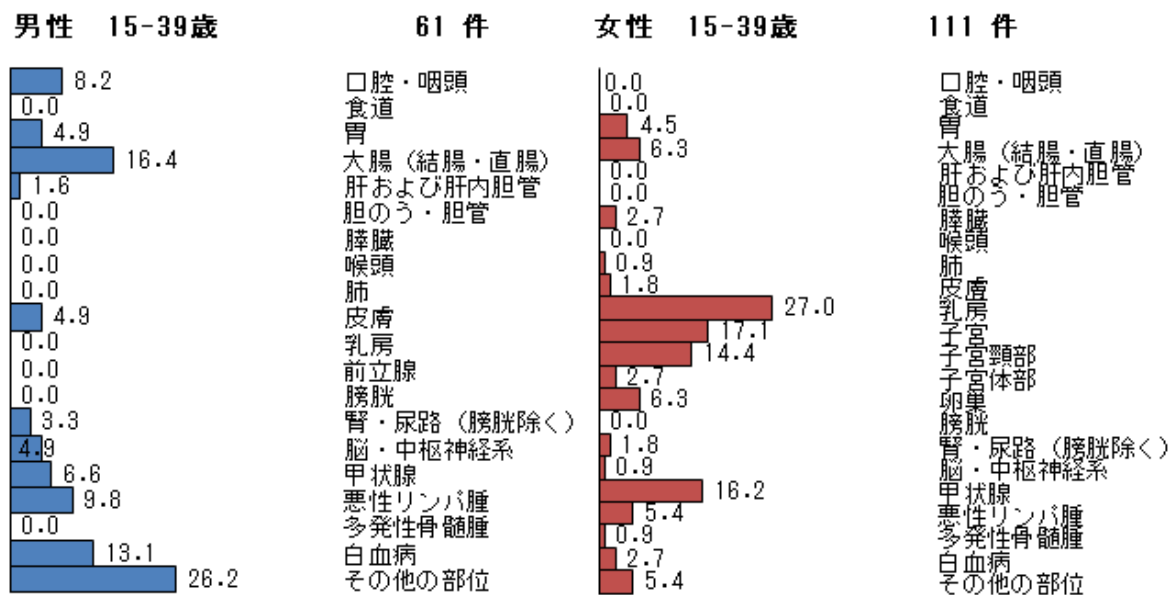
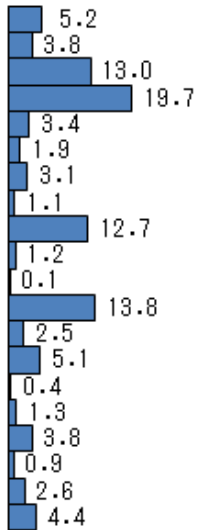


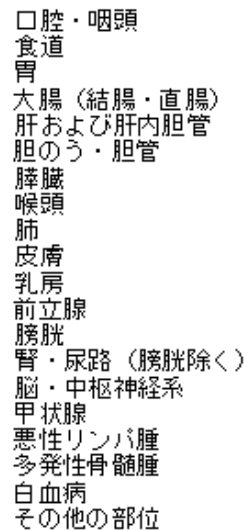
図3 年齢別部位内訳(%) (表2-Aから作成)



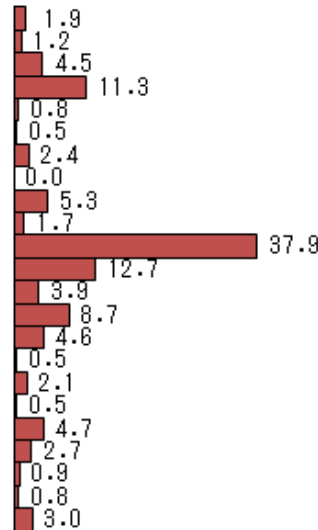
男性 40-64歳



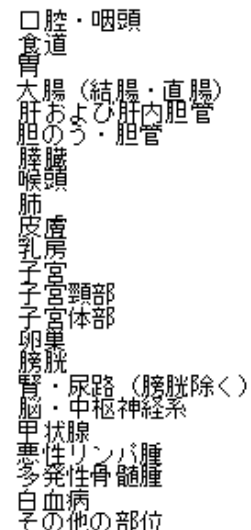
936 件



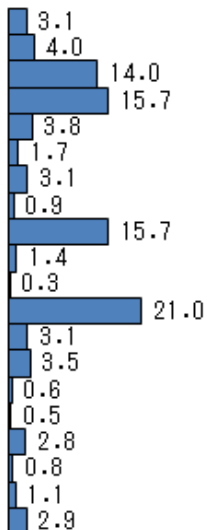
女性 40-64歳



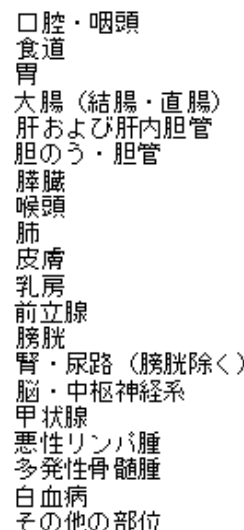
1,129 件



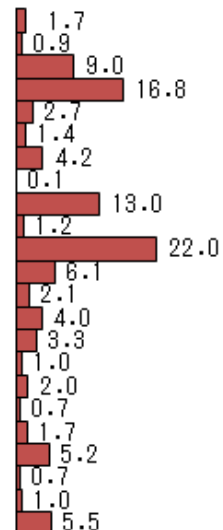
男性 65-74歳



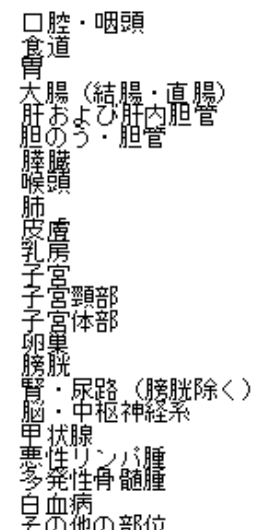
2,338 件



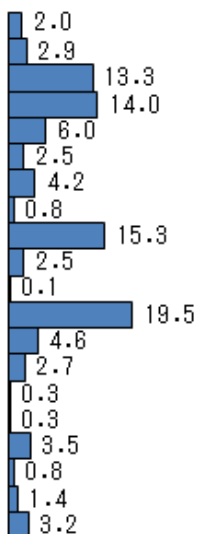
女性 65-74歳



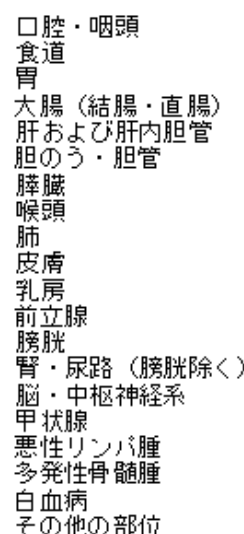
1,320 件



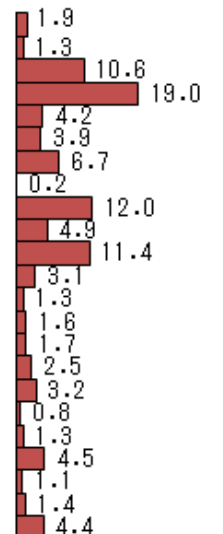
男性 75+歳



3,508 件



女性 75+歳



2,639 件

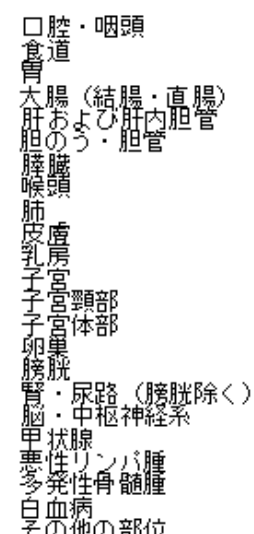
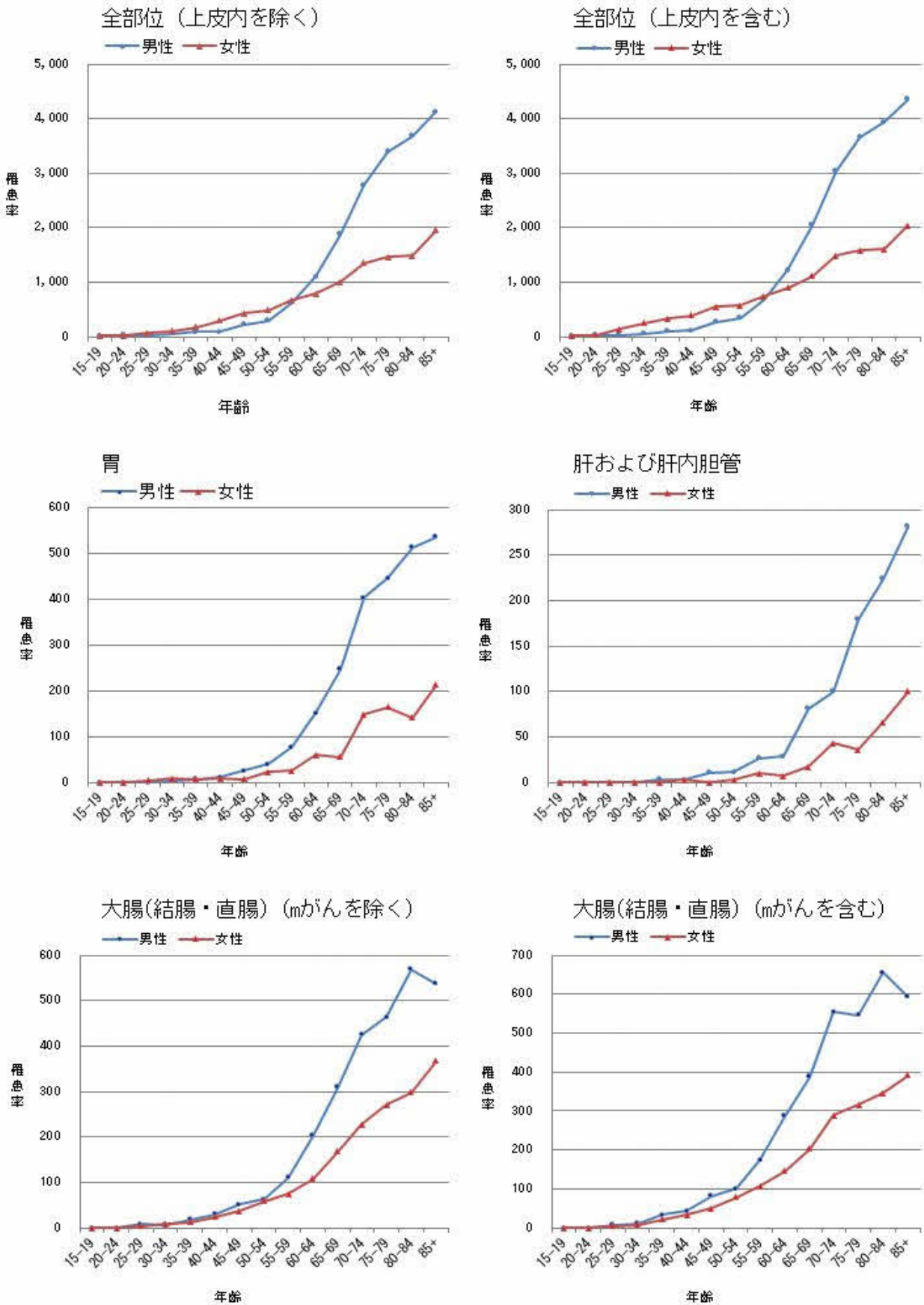
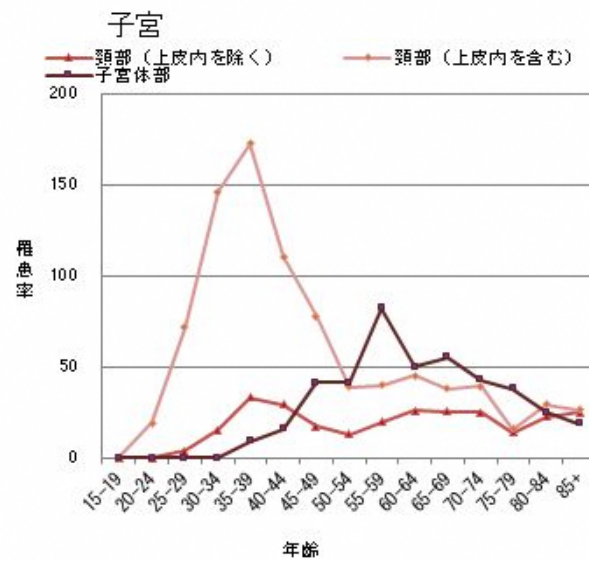
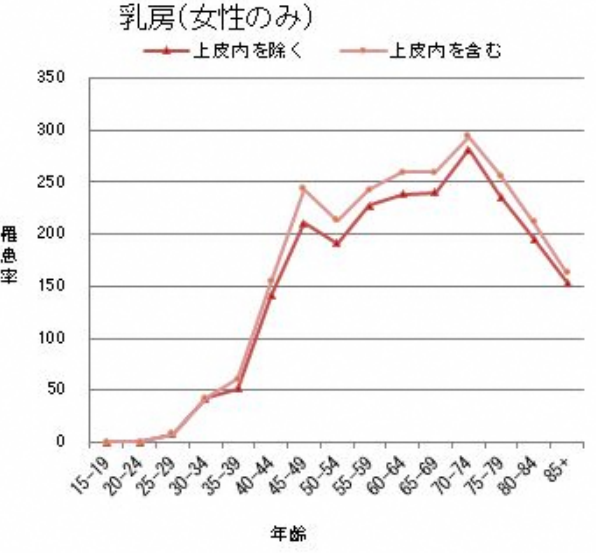
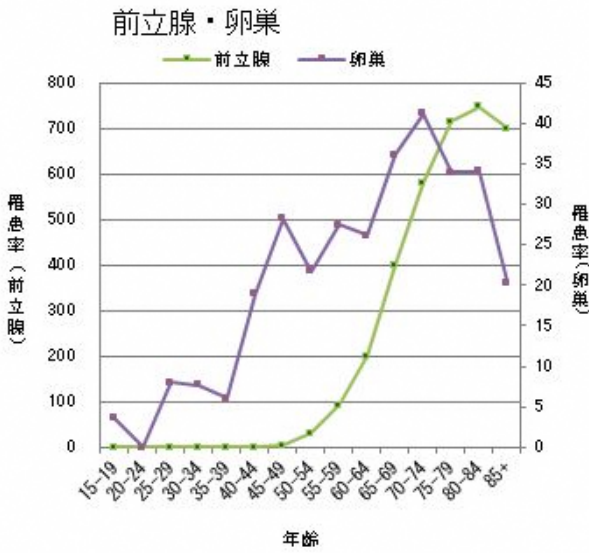
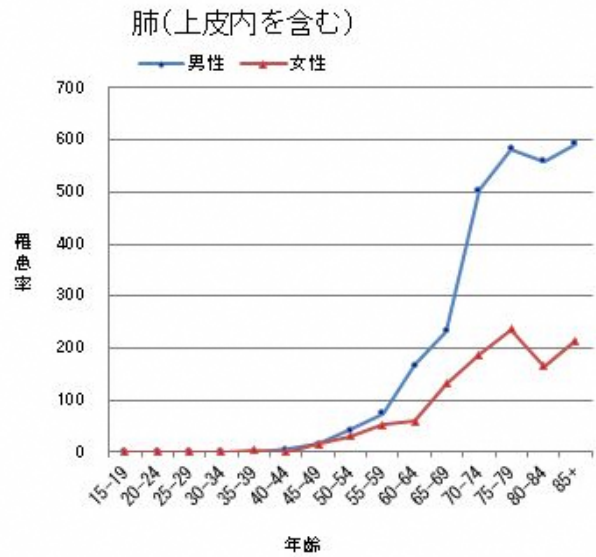
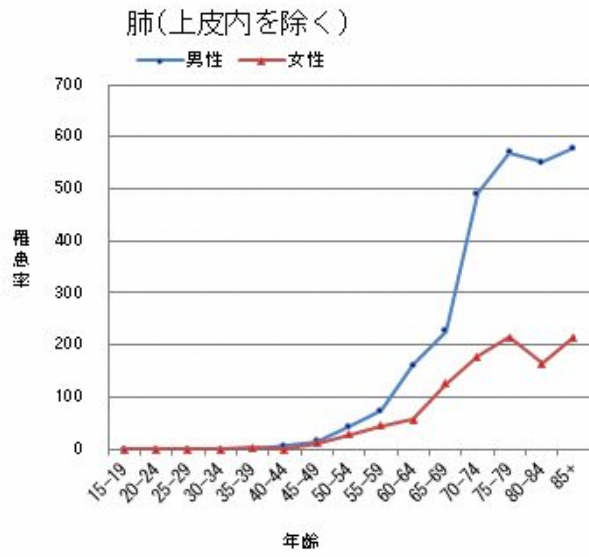


図4 部位別年齢階級別罹患率：人口10万対（表3-A, Bから作成）



※mがんについて：全国がん登録では、大腸（結腸及び直腸）の粘膜内がん（mがん）は上皮内がんとして扱う。

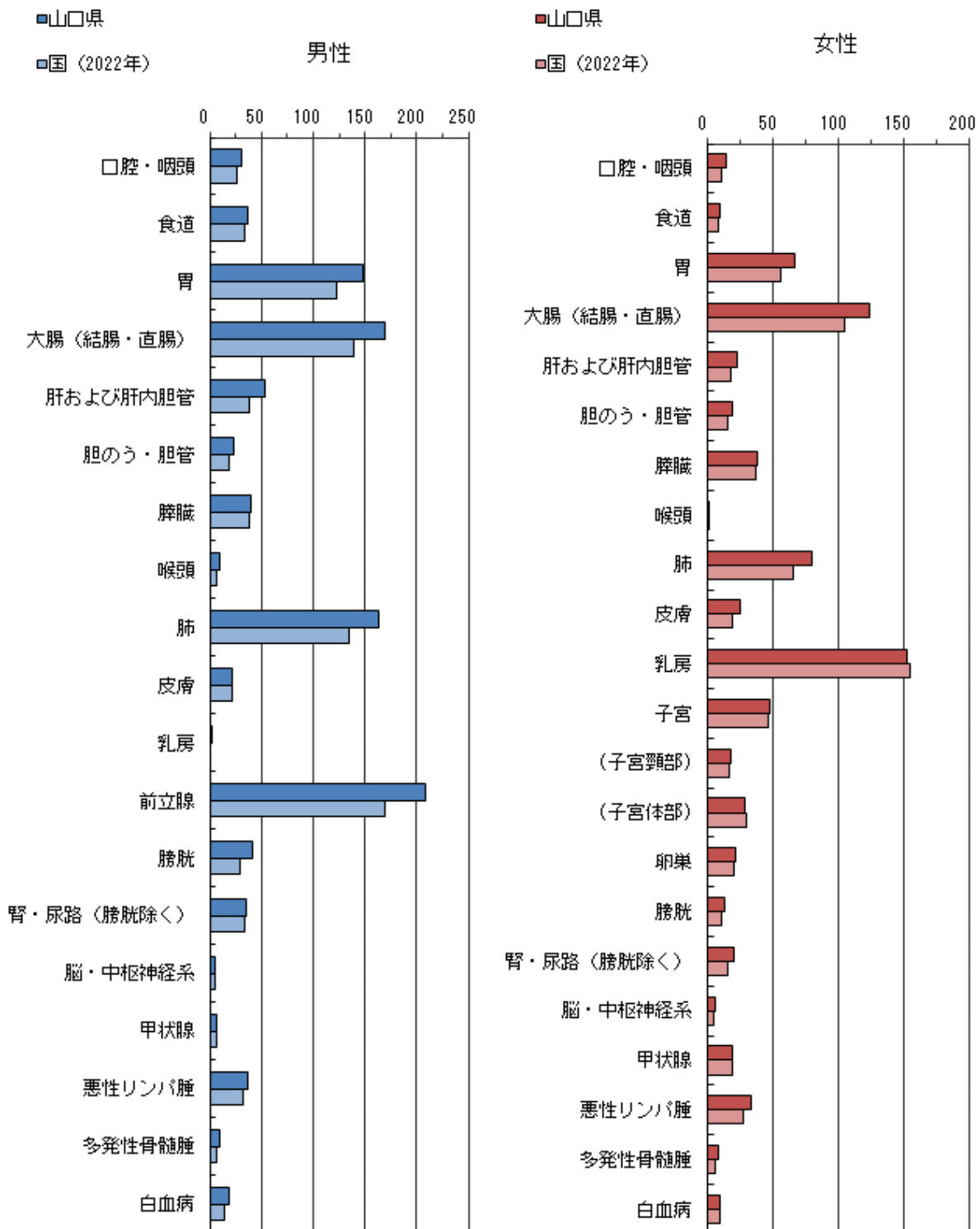


山口県のがんの罹患の特徴

ほとんどの部位において、日本全体の推計値と比較して罹患率が高い。特に、男性は前立腺、大腸（結腸・直腸）、肺、胃、肝および肝内胆管、膀胱において差が大きい。

女性は大腸（結腸・直腸）、肺、胃において差が大きい。

図5 部位別がん罹患率：人口10万対（表1-Aから作成）



※国の値は、最新の厚生労働省健康・生活衛生局がん・疾病対策課発行「令和4年全国がん登録罹患数・率報告」より引用。

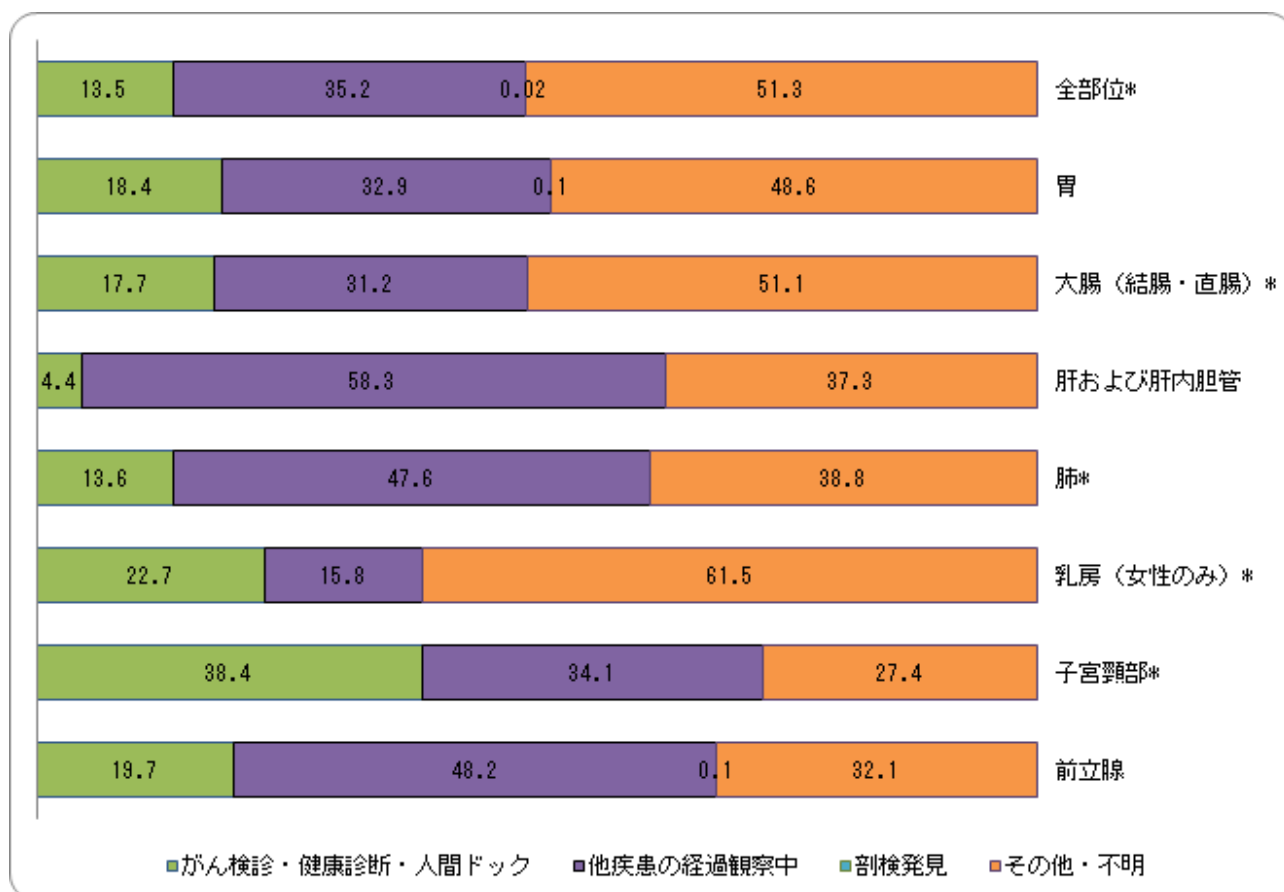
発見経緯

一般に住民検診が実施されている部位において、がん検診もしくは健康診断や人間ドックが発見の契機となった症例の割合は、胃 18.4%、大腸（結腸・直腸）17.7%、肺 13.6%、乳房 22.7%、子宮頸部 38.4%であった。前立腺においても、がん検診・健康診断・人間ドックが発見の契機であった症例の割合は 19.7%である。その他・

不明には何らかの症状による医療機関受診時の発見が含まれる。今後は、その他・不明の割合が減少し、検診等で発見された割合の増加が望まれる。

肝および肝内胆管において、他疾患の経過観察中の発見が多いのは、肝炎や肝硬変の治療中の発見によるものと考えられる。

図6 部位別発見経緯（%）：対象はDCOを除く届出患者（表4-A, Bから作成）



*上皮内がんを含む。

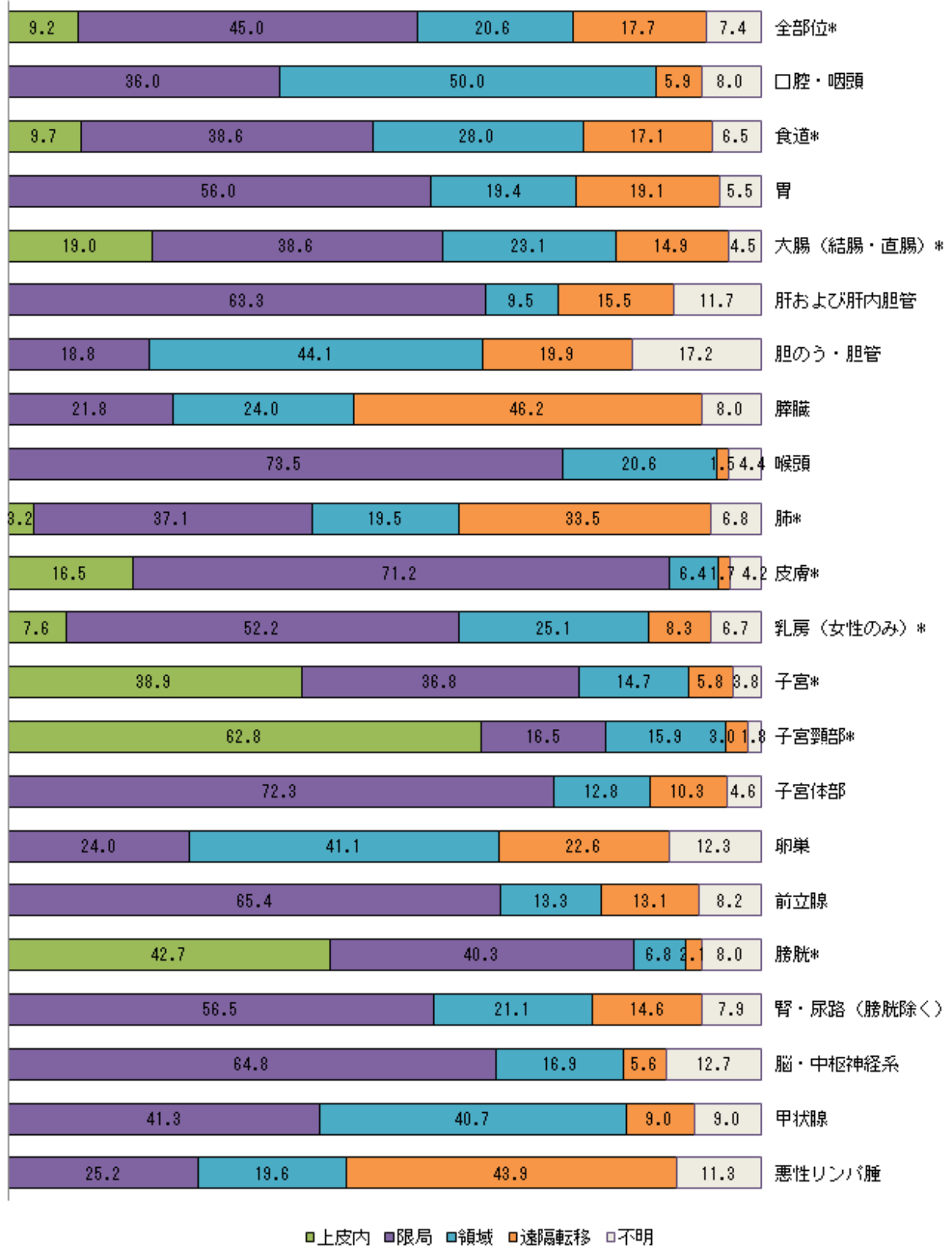
病期

一般にがん検診が実施されている部位は、検診を契機に、自覚症状がわかりやすい部位は、受診を契機に早期にがんが見つかり、発見時の病期が上皮内がん、限局がんの割合が高い。また、肝および肝内胆管では、他疾患の経過観察中に発見される場合が多いため、初期の段階で

発見されていることが考えられる。

一方、肺は、がん検診が実施されている部位ではあるが、発見時に遠隔転移があった割合が高い。膵臓は、比較的大きくなるまで自覚症状が出にくいため、発見時に遠隔転移があった割合が高い。

図7 部位別発見時の病期（%）：対象はDCOを除く届出患者（表5-1-A, Bから作成）



*上皮内がんを含む。

胃の限局には、mがんを含む。

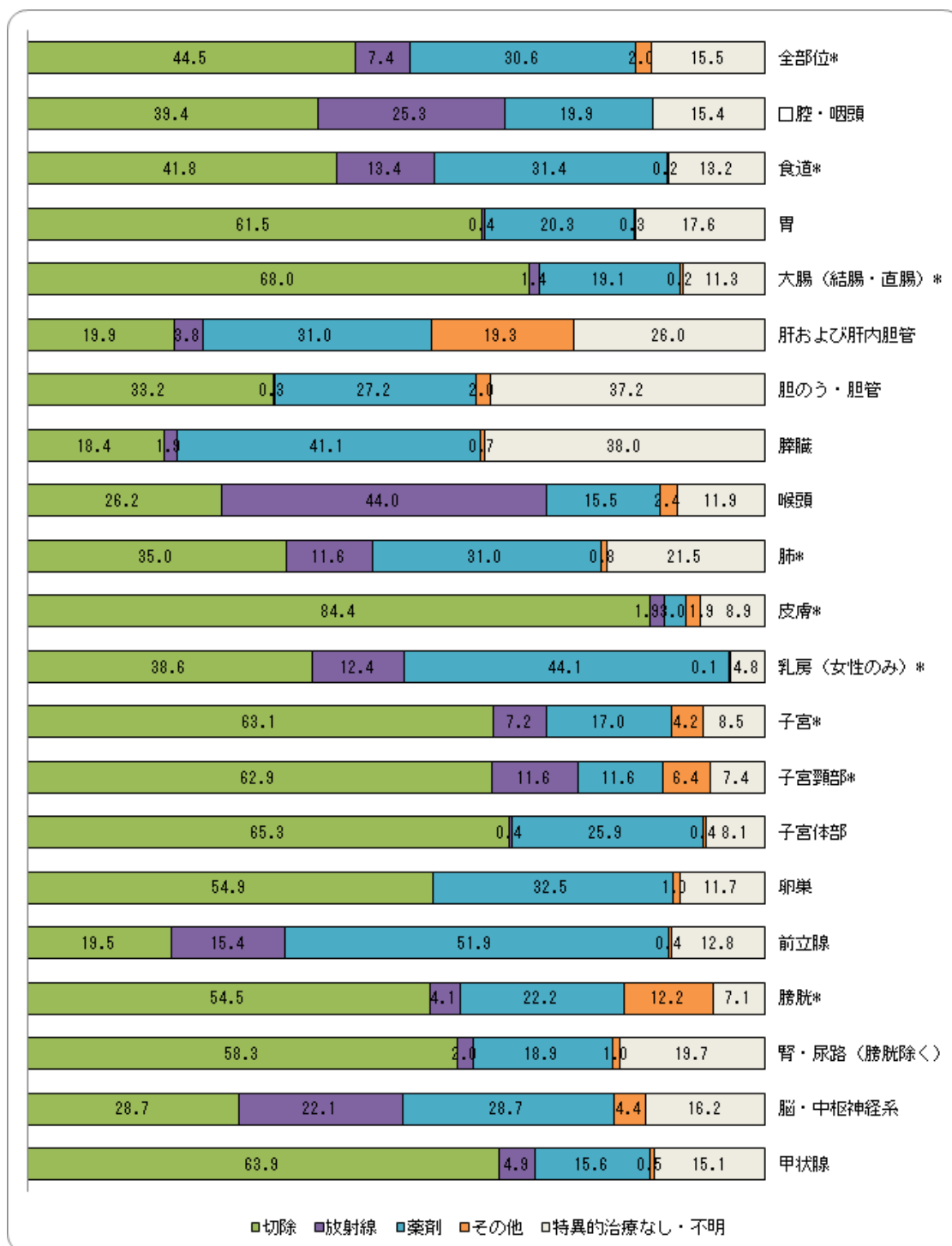
結腸・直腸の上皮内は、mがんまでを指す。子宮頸部の上皮内は、CIN3を含む。

初回治療の方法

胃、大腸（結腸・直腸）などの消化管、乳房、子宮では、手術などの外科的治療の割合が高い。また、口腔・咽頭、食道、膵、乳房、前立腺で

は、薬剤や放射線による治療も比較的多く行われている。特に乳房では、切除と併せて補助療法を行っている場合が多い事がわかる。

図8 初回治療の方法（%）：対象はDCOを除く届出患者（表6-A, Bから作成）



*上皮内がんを含む。

複数の治療を併せて行った場合は、重複する。切除には、外科的、体腔鏡的、内視鏡的手術を含む。薬剤には、化学療法、内分泌療法を含む。